

象徴

と象徴的作用

—モーリスとカッシーラー—

川戸好武

はじめに

「象徴」と言ふ語によって今日人々が連想するのは、大抵、天皇の事であろう。さきなければ極く一部の人は、フランス象徴派の詩人達を思ひ浮べるかも知れない。筆者は浅学で、マラルメやヴェルレーヌについては殆ど何も知らないで、文学に於ける象徴主義については、遠慮ながら何ぞ述べる事が出来ない。「天皇は、日本國の象徴であり日本國民統合の象徴であつて云々」憲法第一條」と謂ふやうな政治的象徴の意味は、少々安易なやり方であるが若波小辞典によると、「ある実体を示す場合に、別の形を借りてその意味を集中的にあらわすをいふ」とある。此の説明の最初に現はれる「実体」と云ふ語の繁雜な使い方は、今日の哲学の論文では見られぬものであるが、それは問題の外に置くとして、政治的象徴の概念にも、代り・代表と云ふ意味が含まれてゐることは右の説明でも明らかである。筆者が今主題とするのは、広く知識現象一般に於ける「象徴概念」であつて、それが政治的象徴の概念にも予想されてゐるのである。かゝる概念が哲學的研究の主眼とされるやうになつたのは、主として、哲学を言語の論理的分析と見なす分析哲学との関連に於いてである。今日の記号論理乃至意味の理論は科学主義的、実証主義的傾向のものが多く、そうした一般の傾向に対して、カッシーラーの象徴論は、批判的觀念論の伝統に固く根指してゐて、顯著な特色を帯びてゐる。論理的經驗論が漸次反省を深めて、一部に於いては、フランクマイネムやカント哲学などに同調する氣配が感じられることを想へば、カッシーラーの「象徴的形式の哲学」は正に、「象徴的」だと言へるかも知れない。

一 記号と象徴

科学的記号論の典型たるチャールズ・モーリスの記号論では、「記号」は最も包括的用語で、記号の下位区分として信号と象徴とがあげられる。モーリスの行動論的な、記号の定義は、少々面倒であるが、その儘あげざる必要はあるまい。訓練された犬に対して、フザールの音は食物の記号であり、人間にとって言葉は食物の記号である。それらが記号であるのは、食物や食物が作用するのに類似した仕方であらう。模へ向ふ行動をコントロールするからである。フザールと言葉とは行動のコントロールの上で、食物の代用をつとめる。モーリスは此のやうに、行動に対する代用刺激をその記号の本質を見るのである。記号の中で、物理的事物や出来事を直接に代表するものを「信号」、それであつて、他の記号の代りとなる代用記号を、信号から區別して「象徴」と名付ける。モーリスは、食物に対する直接性・間接性に加つて、

記号の二用者又解読者がそれを作り得るか否かを、信号と象徴との區別を表して置ける。犬はフザーの音を自分で作る（フザーを自分で鳴らす）ことは出来ぬから、フザーは犬にとって信号であるが、言葉は、人が必要に応じて発声したり書いたり出来るから、此の基準に照する限りシムボルである。たゞモーリスは信号とシムボルの差別を重要視しない。一定の區別を表によって一応區別は出来るが記号たることに何等変りはない。と謂ふのである。

他方、ランガーは、信号とシムボルの別は動物と人間との差別に對するものとして大いに重視する。瀧沢は街路は直接に雨の降ったことの信号であり、汽笛は汽車や船の出発の合図である。斯様に信号は直接に物や出来事を通知する。これに對し、シムボルは対象の代用ではなく対象の思念の用具である、換言すれば、シムボルは解読者をして対象を思念せしめるものである。モーリスは、一つには客観的アプローチと言ふ科学的方法論の観点から、他やその思念又は觀念と言ふやうな觀念論的 (mentalistic) 觀念の導入を嫌ふのである。行動主義と云ふ方法論については、他の機会に「人文社会」に述べたので再説しないが、それ以外に、動物の記号行動と人間のそれとの間に差異を區別を立てまいとする科学的記号論に共通する自然主義的觀方も働いてゐることを指摘し度い。

だが動物の記号行動と人間のそれを原理的に區別しないとはいへ、言葉を記号一般と同視する筈はない。言葉は記号の一種であるが、記号が言語たる爲には幾つかの条件を充たさなくてはならない。その条件として、(1)多数の記号から成る。(2)その記号の各々は多数の解読者に対して共通の意義を持つ。(3)解読者が作り得る。(4)意義の相対的な恒常性。(5)多数の記号が相互に内的関連を持つ体系をなす。これらがあげられる。

先にシムボルの条件として、モーリスは同義的なる他の記号に對する代用記号をすることを以てした。言語記号の諸条件を列挙した後、知覚が記号プロセスであるか否かは、俄かに決定し難い、と云ふ理由で、言語を象徴と定義せぬ方が良い、と謂ふのである。元來モーリスにとっては、信号とシムボルの區別は記号にとっては是非とも必要とするやうな種類のものではないのであるから、言語がシムボルであるか否かは、第二義な問題に過ぎなかつたのである。

所が、知覚を疑もなく記号プロセスと見なしてこれは第一次信号系、言語は信号の信号として第二次信号系と謂はれる、——この辨別はパーフロフの条件反射學に基づき、ソヴェートの公認の教説となつてゐるものである。其の際、知覚は讀みまでもなく、客観的、物質的存在の信号と見なされてゐる。

記号を觀念や思考へ關係付けることによってシムボルを定義した、モーリスが觀念論として拒けた見解が、はしなくも、唯物論の記号論理と一致する点の在る事は興味深い。

言語をシムボルと見なすが否かは、シムボルと云ふ語の意味が予め確立して、言語が、一定の意味を持ったシムボルと云ふクラスに屬するか否かと云ふ問題ではない。「シムボル」の意味を決定することが寧ろ問題である。しかし言語をシムボルと見なし得るやうに「シ

「ムボル」の意味を定めるのが良いとは始めから定まっていることではない。抑々信託とシムボルを区別する尊尊な動機の一つは、言語を他の種類の記号から分たうとする所に在る。問題は次のやうな事情によつて複雑に言われている。一方では、普通の用法では政治的象徴や宗教的象徴を区けて「シムボル」なる語が多用されて居る。他方では、日常言語乃至自然言語そのものか、一般的に、又は何々の言葉に於て、シムボルとは言はれない。「何かか何かのシムボルである」と云ふ又は言語に於てのみ表現され得るが、言語そのものがシムボルだとは普通言はれないであらう。又、例へば何かの秘密結社のメンバーの間に一定の合言葉が定められていて、それによつて互ひにその結社のメンバーであることを確め得るやうな場合、その合言葉は結社のメンバーであることのシムボルだと言ふことは出来るであらうか、その場合でも合言葉に選ばれた特定の言葉そのものがシムボルではなく、ある約束が、それらを結社への加盟のシムボルたらしめたのである。トームの動物は原始的信仰のシムボルであり、首に下げた十字架はカトリック・キリスト教信仰のシムボルである。トームは非印民族自身に於ては、彼等の先祖の代りではなくて先祖そのものと信じられているかも知れないが、我々がそのやうに言ふ場合には、シムボルは直接に理解され得ないやうな思想的、観念的な何かがを、直接に知覚され得るやうな仕方ではあらはすもの、として理解されているであらう。此の點では政治的象徴も異なる所はないやうに思はれる。日常の用法に於ける「シムボル」の意味は大體右の如きものであらう。「象徴」と云ふ語が、何かしら有難いやうな、神秘的な感情的、情緒的内容を持つのは、それが、何か目に見えないものの代りだからであらう。「象徴」

自然言語そのものをシムボルとは呼ばないだけではなく、数学的論理学に於ては、自然言語を「象徴化」「記号化」する。「又は」、「そして」、「若し……ならば……」のやうな論理語の代りに、夫々「 \wedge 」、「 \vee 」、「 \rightarrow 」の如きシムボルを用ひる。だがこれらは、夫々の自然言語そのものの代用ではない。論理学のこれらのシムボルは、一定の真理値（真と偽）の組合せをあらはすに過ぎぬから、自然言語の持つ意味と部分的に対応してはいるが、後者が前後の脈絡や、発音の変化によつて有し得る複雑なニュアンスとは全く無関係である。ただ論理的シムボルも、真理値の組合せ、クラスの前であること、クラスの互換関係、ある断定が凡ての物についてなされること等々の如き一定の論理的意味の代用表現である。と言ふことが出来る。それらの意味は自然言語によつて表現出来るが、シムボルの使用によつて、自然言語では不可能でなくても非常に困難な推理を行ふことが出来るのである。論理的シムボルの体系は、推理の目的に使用される人工言語なのである。それは正確である代りに、生活の多様なニュアンスからは全く排除されている。それが正確であるのも、初めの定義によつて与へられた論理の意味を決して変へないからである。人工言語には方言は生じ得ない。

モーリスは、^{象徴}を、他の等義的な記号の代用記号と定義した際に、トームや十字架のやうな宗教的シムボルにかかはる通常の用法と多少ずれがあることを認めつつも、彼の定義によつて普通の用法も説明出来ることはない。とした。そして言語をシムボルと謂ひ得る處には、知覚が記号的プロセスであるか否かを決定しなくてはならぬ。と述べている點に於ては既に触れた。だが、単に等義的な他の記号の代用記号と云ふだけの条件を挙げ、等義語を持つての言葉はその条件を充たし得るからシムボルである。あらゆる言葉は辞義的定義が

可能であるから、定義項となる凡ての複合的表現は被定義項の代用としてシムボルたり得ることになる。知覚の問題を決定しなくても、か
く考へれば、凡ての言葉は単独で、又は他の語と結合して、シムボルだと言ふ結果に導かれる。言葉をシムボルと見なすか否かは、原理上
重要ではないとしても、どちらでも解釈出来るやうな定義標準は、標準として適当でないと言ふべきであらう。

だがランガの、直接に事物を指示するが、事物の思念へ關係付けるかによる規律も受け入れ難い。と言ふのは、濡れた街道は、単に雨
が降つたことの自然的结果であるのに対し、汽笛は人間のいる集団に於ける約束によつて、出発の合図となる、と言ふ大きな相違があるが、
共通点もないわけではない。濡れた街道が雨を指示するのは、雨との因果關係を知り、且つ、それに基づいて推理を行ふ人——解釈者に対し
てのみである。汽笛もそれが出発の合図たることを解しない人にとっては、一種の騒音に過ぎまい。何れの場合も解釈者の理解・解釈を媒
介して事物・出来事を示すのであるから、ランガの標準ではシムボルとなる。記号が記号たる限り、必ず解釈を予想する以上シムボル
でない記号は存しないことにならう。又實際「シムボル」を「記号」と等義に用ひる用例は、日常的にも学問的にも珍らしくはないのであ
る。後者の最も顕著なサンプルは、意味論の先駆的な書「意味の意味」に於ける、シムボル——指示(思考)——被指示体(対象)の三角
形であらう。

以上によつて、記号の中で、シムボルと信号とを区別すべき二つの規律は必ずしも適當と認め難いことを論じた。不本意ではあるが、信
号とシムボルとの区別は重要でない、と言ふモーリスの主張に同意せざるを得ない。しかしそれは、言葉を記号一般のレベルに於いて、専
ら行動論的に考察する方向に於てではない。モーリスの言語考察は、その定義にも判然と窺はれる如く、既成・既存の言語の作用や性格に
關注されている。それは、経験科学的理論をなすことを標榜する連綿からして、当然のことと考へられるが、彼はそこで實際に行使している
方法は、経験科学の帰納的方法ではなく論理的な分析と綜合である。モーリスが看過している重要な観念の一つは言語の生成と云ふ点であ
る。カッシーラは、文化哲学の広い視野の中で、言語の機能をその生成に遡つて探求しようとする。もとより生成といっても、言語史的な
意味のそれだけではなく、論理的意味の生成である。

彼は、該博な言語学的知識を駆使して、言語史的考察を呈示しているが、此処では、彼の論理的・認識論的な考察を取上げよう。

二、象徴的機能

私が庭の木を見て「この木は松だ」と言つたとき、こう言ひ得る爲には、先づ私は予め木とは何云ふものであり、松の木とはどう
云ふ木であるかを知つていなくてはならない。更に、今眼前にある木らしい物を見て、その樹肌や針葉の目に映じた所を、「松」と云は
れる樹木の記憶像と比較し、現前する感覚像の基本的な特徴が、松の木の記憶像の主な特徴と一致することを確かめなくてはならぬ。勿論
これらの事が、同様の判断を下す際に、一つ々々順序を定、未だ時間をかけて行はねばならない。多くの場合眼前の木を一見しただけで即座

に判断が行はれる。しかしそれが松であるか形であるかに迷ふ際には、略々、今述べたやうなるロセスの起ることが自覚され得る。

ある種の植物を樹と云はずに「木」と謂ひ、ある種の樹木を「杉」「ヤ」「樺」でなくて「松」と呼ぶことは、実物と名称との結びつきを教へらるゝことによつて獲得される。

何故松を「マツ」と呼ぶか、「メツ」とか「ミツ」と呼ぶぬのであるか、又、木はどうして「ク」ではいけないのであるか。名と物との結合は、「規約的」(Conventional)だと云ふ見解が、特にホッブスやロック以来有力になつてゐるが、自然言語は人工言語に於ける如き仕方では規約的では決して有り得ぬものなつて、我々には通り得なぐとも、名と物との間には必ずや何かしら「自然的」な結びつきがあるに相違ない筈である。この主張は一種の作り話(Myth)だと、ラッセルが述べてゐる。

斯様に日常的生活内に在る事物の認識現象は、語彙の点を除けば、悉く経験的次序で説明し盡されるやうに見える。だが、如上の科学的。説明の中には、此の説明自身が貸付いてゐないか、又は、自明的な事柄として前提してゐる論理的な要素が含まれて居る。それ至今指摘して置よう。

先づ「此の木は松である」と云ふ文は前述の主語―述語形式の文である。そのことを知らずに、又は知つていても意識せずに此の種の文を作ることは勿論可能であるが、それを知らない、又は意識しない、と云ふ事は日常的文の多くが此の形式に属するといふ事實には影響を與へない。ある種の文が主語―述語形式を持つと云ふことは、大抵学校で、文法乃至論理学の「事項」として教へられて知る。文の形式として云つてゐるのは、文中の名称は、交項で、論理語は所謂論理的常項でおきかへた表現のことである。昔の論理学の、素朴な形では、「SはP」がそれである。此の形式は単に「此の木は松である」と云ふ特定の、一つの文の形式であるだけでなく、要素を異にする無数の文に共通な、一般的形式である。かかる一般的な形式は如何にして知り得たか。と云へば、大抵の人は、多数の個々特定の文の観察から、それらに共通なものをとして抽象された謂ふであらう。

次に、名と物との結合の学習についても、同様の事が見出される。実物と云ふものは、昔から知られてゐる様に、個々特定の物のみである。かう云ふ木を「松」と云ふのだと教へられる時、その木は特定の場所にその特定の時間に生へていた特定の木であつて、松そのものが松一般ではない筈である。「松」と呼ばれる木は一定の特徴を與へていて、それらの特徴を與へてゐる木は、どれでも松一般を代表し得ることが既に知られてゐるのでなくては、任意の松の木を「松」となる語を覺えさせる爲に用ひることは出来ない。そこでこの場合にも、ある種の樹木に共通な特徴がそれから抽象されて、「松」となる語の内包とされるのだと云はれるであらう。

右の如きが概念形式に關する心理学的抽象理論である。これは極めて解り易く、經驗的且合理的であるやうに見える。だが此の理論には、注意すると、奇妙な矛盾が看過されてゐる。と云ふのは、松の共通特徴を抽象するに先づいて、「一本々々の木が松であることが予想されてゐるし、文の共通形式を觀察するに先づいて、個々の文が主語―述語形式の文であることが、暗々裡ではあるが、既に知られてゐるので

ある。勿論、實際問題として我々がなごは何等考慮ではないと、論者は反論するであらう。確かに此の種の事柄は経験科学者の主題ではないであらう。けれども、事象の論理的主題とする限り、これは問題とするだけの価値は充分ある。又史的にも認識理論の経験論と合理論の対立は此の点に集約される、と言ふの事逸言ではない。

もう少し簡潔の同じ問題を提起してみよう。我々は既に草や木を知らず、松や杉を知っている。我々の世界は既成・既存の概念によつて細かく整理と分類され知識付けられたコスモスである。かうした秩序あるコスモスから、分類以前のカオスの世界こそ人類の言語生成の原状況ではないであらうか。我々は既に草や木を知っているから、名を知らぬ木に遭遇しても特に驚くこともなく、困難の類で認べることも出まるとし、いかなる困難にもないやうなものであらう。我々の世界は既に既成・既存の概念を以てその不可解な存在に当るより外に術はないであらう。未開民族が始めて文明の利器に接する時の状況は恐らくそのやうなものと想像される。多くの物がまだ無名で、生活に直接關係のある事物に始めて名を付けやうとするやうな状況といふものは勿論架空のものでしかあり得ぬが、しかしそれは全くあり得ない状況ではない。先史時代に存在したであらうと想像されるものである。人類の進化の諸段階に各々が暗内で経過すると言ふ。生後数ヶ月の幼児は想像上の原始状況にある程度経験して行くのであらう。始めて物に名を付ける場合には、多数の異名の現象に遭遇する。草と木の別もさだかではあるまい。そこにはまだ混沌たる意識の流れしか見出されない。カッシーラーの表現をそのまま繰り返して云ふならば、かかる意識の流れの中に「切りこみ」(Einzelwurz)は一つ、ある内容をそれとして同一化し、他の内容が差別することが必要である。ある時に体験される意識内容は、一回限りのものであるが、ある一つの内容が、同一化され差別化されて、ある特定の名称とへられるのは、一回限りのものとしてではなく、同様のものの代表としてであらう。

こゝに現はれた同種乃至類似の云ふ概念は、実は非常に説明困難である。経験的、日常的には、向かが何か他のものになつていくと云ふこと何の困難を感じないで済まされる。だが、論理的には、結局それを何か他の概念に還元しようとするに、端的にそれを何、他にどうして定着出来ない「原始的」(primitive)な概念として前提した方が、度々そうである。心理学的抽象理論を排する際にも、ある普通の概念(例へば白と云ふ性質)を、その性質を持つ一つのものを支配例として、それに類似の性質として定義する方法がとられることがある。

同一化と差別化とは同じ作用乃至機能の異なつた名に過ぎないが、命名(象徵化)と云ふ根本機能の本質的条件たるこれらの作用も亦、先にみたやうに類似性の概念なしには定義乃至説明され得ない。兎もあれ、これらの働きは、同時に一に於て多を、部分に於て全体を、個別に於て類を代表する機能である。カッシーラーはこれを象徴的機能と名付ける。

説得たる言語はかかる象徴的機能の結末であり、同時にかかる機能を自ら果している。我々は通常、遭遇する現象をあるがままに知覚し、

そのやうに既に認識されたものに、適當なるを應用する、と考へ勝ちである。しかし、感覺が純粹に感覺だけで機能し、裸の事實を我々に對して提示する、と云ふことは、論理的に考へて決してあり得ないのである。感覺は過去の全經驗の一要素としてのみ働き得るのであり、又「一切の事實的なものは理論「ゲーテ」(女)のである。カントが既に、理性はその思想を手にして自然に向ふ、と述べている。理性の道具たる思想とは、もとより天与・生得の觀念ではない。それは象徴的機能の一定の形式に外ならない。同一性、差異、類似性の如きがそれに屬するであらう。カッシーラーに依れば言語に始まる人間の文化の営みは、客觀的に存立する外的世界内的世界に於て単に模写するでも、完成せる内的世界を並に外に向つて投射する所に成立つのももない。象徴的機能の媒介によつて、内と外、自我と現實と云ふ二契持から始つて規定を得、相互に聯繫付けらるるのである。

筆者はカッシーラーの立場を象徴的営みの考へてはいないが、釋義主義的記号論に對し、批判的觀念論に基づく彼の言語哲学の主張が決して無意味でないことを示さうと試みたのである。(終)